

## 刊行にあたって

2019年、私は父より医院を継承しました。当時の年間売上は約1億7千万円でした。それから7年。現在、医院の売上は7億円を超える規模になりました。数字だけを見れば、急成長と言われるかもしれません。

しかし、私が追いかけてきたのは「売上」そのものではありません。地域の人が本当に困っていることは何か。その期待に応えられているか。その問いを突き詰めた先にあったのが「小児矯正」でした。

私の家は、代々「地域に何を返せるか」を第一に考えてきました。経営の目的は医院の拡大でも、利益の最大化でもありません。地域の人が喜ぶことを提供すること——それが根幹です。

### 小児矯正は地域課題への回答

歯並びの問題は、単なる審美の問題に留まりません。口呼吸、姿勢、嚥下、睡眠、将来的な抜歯の可能性、そして大人になってからの補綴治療や外科治療に繋がるケースもあります。地域の子どもたちが抱えるこうした課題に、できるだけ早い段階から向き合える医療が必要だと感じました。

小児矯正を導入した理由は、“儲かる診療”だからではありません。地域にとって必要だと判断し、医院の軸に据えました。その結果、医院の構造が変わり、数字にも変化が表れました。

### 理想どおりに進まない現実

理想があっても、小児矯正の運用は簡単には定着しません。導入当初の私は「装置を導入すれば小児矯正は順調に進む」と考えていました。しかし、現実とは違いました。

MFTが続かない。Myobrace<sup>®</sup>が形骸化する。装置が破損する。家庭内マネジメントは崩れる。スタッフの温度差が生まれる。地域連携も理念だけではかたちにならない。頭ではわかっていたはずのことが、現場では次々に壁として

立ち上がってきました。

とくに苦しかったのは、「やるべきこと」は増えているのに、治療が思うように前に進まない時期です。説明に時間をかけても、継続に繋がらない。院内の足並みが揃わず、家庭側の状況も揺れる。正直、「これは無理かもしれない」と思ったこともあります。

こうした失敗を重ねて、小児矯正は導入しただけでは期待どおりの成果に繋がらないことに気づきました。

## 運用と文化の設計

導入初期の混乱を経て私が痛感したのは、「装置の問題」ではなく「続く前提」が整っていないという現実でした。つまり、院内の共通理解と、家庭で続けられるかたちが整っていないと、治療は前に進みません。

そこで私は、小児矯正の患者さんを増やす前に、運用の前提を整えることから始めました。院内で同じ言葉・同じ基準で話せる状態をつくり、家庭でのトレーニングが無理なく続けられるように進め方を見直し、チームが同じ方向を向けるように土台を作り直す。派手な改革ではありませんが、まずここを整えないかぎり、何を導入しても回らないと感じたからです。

こうした立て直しを進めるうちに、小児矯正は単なる「一つの診療メニュー」ではなく、医院全体の構造を変える“軸”になる領域だと実感するようになりました。完遂率、家族単位での通院、スタッフ教育、地域連携、紹介の流れ——小児矯正の運用を整えることは、結果としてこれらにも波及していきます。

売上は目的ではありませんでした。しかし、結果として小児矯正の比率は上がり、治療完遂率は改善し、スタッフ体制は拡充し、患者紹介の流れも強くなっていきました。組織が強くなり、地域との接点が増え、患者さんとの関係が深くなる。そうした「構造の変化」が、結果として数字に表れただけなのです。

## 機能が形態をつくる

この運用と文化を支えているのが、私たちの臨床思想——「機能が形態をつくる」という考え方です。

本書の症例はすべて、同じ思想に基づいています。機能を整え、その結果として形態が整う。MFTで土台をつくり、Myobrace®で再学習し、イージーエクスパンダーで拡大と日常性を両立させ、必要最小限の固定式装置で仕上げる。順序を守り、役割を分担し、経過の評価を可視化する。

思想を整えずに拡大を追えば歪みが生じやすく、機能を整えずに形態だけを追えば後戻りしやすい。医院経営も同じだと考えています。

## 失敗を含めた実践の記録

本書は成功談ではありません。当院の臨床例を紹介する Part 4 では、装置破損、装着拒否、家庭内マネジメントの崩壊、受験期中断、里帰り出産による通院停止といった理想からはほど遠い現実と、それでも治療が進み、外科回避や非抜歯での改善、生活との両立に繋がった経過までを収めました。私の経験が、皆様の現場の判断や工夫の参考になればと願っています。

## 小児矯正を軸にするための設計図

小児矯正が伸びない、スタッフが育たない、MFTが続かない、地域連携がかたちにならない、経営と臨床が分断している。そう感じているとしたら、それは能力不足というより、設計の問題であることが少なくありません。

本書では、うまくいかなかった時期も含めて、「どこで詰まり、何を変えたか」をできるだけ手順として残しました。小児矯正を医院の軸にするための設計図として、ご活用いただければ幸いです。

2026年3月  
押村侑希